

故ニック・ユソフ君を偲んで

—「原和平の下せよ」といふ上、

日時の順序は逆になるが、当時の南方特別留学生のチューター、上遠野寛子さんは、前日の京都での故サイド・オマールの法要に参加された後、9月4日広島に立寄り、故ニック・ユソフの墓参をされた。ちょうど星月住職御夫妻も寺におられ、読経の時をもった。



案内をした小生と昼食の時、オマール、ユソフ等の写っている写真を眺め、ちょっといたずらっ子気味のユソフについて語り合った。一人だけジャンパーを着用し、いかにもオッショコチョイの感がある風貌に、留学生のうち、たった一人、何で五日市まで逃げ出したのか、体力に消耗が少なければ、助かったかもしぬれないのに。日本になぞ来なければ良かったのに、かわいそうで、かわいそうで二人とも言葉がとぎれてしまった。千田町の広島文理大構内に野営した留学生は、ほとんど生き延びている。それだけに気の毒で1年に1回ぐらい墓前に来てあげたいニック・ユソフ君の墓参である。

今年は田中隆莊新学長もお越しいただいた8月7日の朝方は曇天で、それほど暑くはなかったが、星月住職様の読経の始まる10時30分頃には、気温はぐんぐん上がり、思わず暑かったろうとに次々、お墓に水をかけるのが当然の状況になっていた。

毎年のように参加して下さる市民の方々は池内智恵子、北川勝子、中村千重子、吉川英子の皆さん方。広島大学は学長以下、上里一郎学生部長、小野文子原爆死没者慰靈行事委員会委員、水谷久人庶務部庶務課長補佐、橋本正庶務課文書係長、秋山吉功秘書係長、山口博国際主幹、永井奏学生部教務課長に小生が法要に加わった。又本年は学生部長の御努力で、オン・ホン・ベン、ヨン・バン・ホア、アムラン・アーメドの3名のマレーシアからの留学生が参加し、仏式の法要のあと、イスラム教にのっとる慰靈を行った。留学生の二人は名前からも分かる中国系で、そのうちの一人は仏教とのことで、焼香にも加わった。



星月住職様御夫人も暑い中墓前にこられ、又法要後の座談の場の用意他、なにくれと、気遣いをしていただいた。

広島で被爆し、生き残えたアブドル・ラザック氏のその後の活躍はめざましい。氏は長い間原爆後遺症に悩んだが、少しずつ回復し、一時忘れかけた日本語を再々の訪日と努力で取り戻し、今はマレーシアの日本語教育の責任者となっている。21世紀のための友情計画という国際協力事業団の青年招へい事業で、本年6月27日から、7月27日までの1か月間、20人のマレーシア男女青年が日本を訪問した。彼らの日本語教育に携わったラザック氏は、何とユソフ墓参を強く勧めた。日本ユース・ホステル協会の世話を、7月20日夕方、長野から広島へ到着した一行は、翌21日

宮島の帰り、平和記念公園へ向かう途中、五日市、光禪寺に立寄り、ニック・ユソフの墓参を行った。京都の「碑道」に入ると、
あのニック・ユソフ君のいたずらっぽい顔が、少しでもなごんではほしいと願っている。ニック・ユソフ君と書いたことに御理解いただきたい。謝り、アーヴィング・カーネギーの墓参。
文責と世話人：歯学部 菅野義信
（著者）中島洋介と西文泰子

第28回 サイド・オマール忌



円光寺山門

今日の円光寺（京都市左京区一乗寺）は、夜来の雨一段と激しく、境内の道は川とまがうほどである。

9月3日は南方特別留学生として、被爆當時広島文理科大学に学んでいたオマール君の命日（後掲直木由太郎氏玉稿参照）である。京都の園部家の御尽力で今年もオマール忌が催された。集まる者、京大前及び現工学部長をはじめ13名。広大からは筆者と折から京阪地区を訪れていた法・経中野事務長補佐と2名であった。

雨で法要は本堂。正11時古賀住職の読経がはじまる。運慶作と伝えられる御本尊の千手観音の前には、オマール君の位牌が安置され、ゆれるろうそくの灯に明るく暗く小刻みに表情をかえている。



祭壇「故サイド・オマール之靈位」と記された位牌がまつられている。

その後、山端平八茶屋での懇親会を終え、オマール忌を通じての平和の存続と参会者の多幸を祈りつつ散会したのは午後1時半。雨は小やみになっていたが、加茂川は水かさが増し、茶色い奔流となって岸をかんでいた。

（著者）広島大学原爆死没者慰靈行事委員会幹事会幹事長 片島三朗 記



古賀住職の法話